

# 『アクバル会典』に見えるインドの 伝統的学術と仏教について

近 藤 治

## はじめに

アクバル時代の歴史家アブル・ファズル(1551—1602)には、ムガル朝下の諸制度を集成した大著『アクバル会典』(*Ā'in-i Akbarī*)がある。この書で取り上げられている制度は皇室関係からはじまって軍隊関係、財政関係、民族誌関係など多岐にわたる分野に及んでいる。インドの民族誌的諸事項を扱ったこの書の第4部は「インド事情について」(*dar aḥwāl-i Hindūstān*)と題されており、そのなかに「インドの学術」(*dānīsh-i Hindūstān*)という見出しのある大きな項目が登場する。この大項目のなかで、著者はインドの伝統的学術についてかなり詳細な紹介と解説を行なっている。

アブル・ファズルは優れた歴史家であるとともに、学問の各分野に通じた百科全書派的な知識人であった。彼は、当時のインドのイスラーム教徒が全人口の1割程度にしか満たない少数派に過ぎないという現実を直視できる柔軟な思考力に秀でていた。このような現実認識に基礎を置いた彼の思想は、自然に非イスラーム教徒に対する宥和主義的で穏健な姿勢をとらせるものとなった。一方、政治家として卓越した現実感覚をもっていたアクバルは、青年時代のこのアブル・ファズルの素質を見抜き、ついには政治顧問として重用するようになった。こうしてアブル・ファズルはアクバル時代の諸政策の決定にも少なからぬ影響力を発揮していくこととなる。しかしまた彼は、正統派を自認するイスラーム界の保守派たちからの批判を避けることはできなかった。

本稿は上に示した『アクバル会典』第4部中の「インドの学術」のところを取り上げて紹介、検討することをめざしている。第1節では、はじめ

にこの大項目の冒頭でアブル・ファズルが行なったインドの伝統的学術の概括的な説明のところをまず紹介することにする。「インドの学術」の大項目は、この概括的な説明につづけて「九派哲学の解説」(tafsīl-i nuh dāna)と題された中項目へと移る。九派哲学というのは、六派哲学すなわちニヤーヤ学派・ヴァイシェーシカ学派・ミーマーンサー学派・ヴェーダーンタ学派・サーンキヤ学派・ヨーガ学派の六派に、シャイナ教徒・仏教徒・無神論者の三派を加えた都合九派の学説をさす。「九派哲学の解説」の劈頭で九派哲学の極く簡単な導入的紹介を行なっているので、この部分も第一節で取り上げることにしたい。本来ならば、アブル・ファズルが「九派哲学の解説」において行なっているのと同じ順序に従って、上に挙げたそれぞれの学派について紹介、検討の作業をつづけていけばよいのであるが、これには実に多くの紙数と長い時間とを要することになる。そこで第二節では仏教徒に関する解説のところを取り上げ、比較的短いこの小項目の全文を紹介し、検討することにする。また第三節では、アブル・ファズルが「インドの学術」のところで行なった伝統的学術の紹介の仕方に見られるいくつかの特徴について、指摘してみる予定である。

本稿が依拠する『アクバル会典』のテキストは、H. ブロックマンの校訂本である(1)。このテキストの不明のところや疑問の抱かれるところは、最良の写本と目される大英図書館所蔵の写本と対照させながら確かめていった(2)。また H. S. ジャレット訳の英語版も常時参照した(3)。以下の『アクバル会典』の引用、紹介において、パーレン( )には原語の表記や簡単な説明、言い換えを示し、キッコー〔 〕には原文にない補足語を示しておいた。

## 1 インドの伝統的学術

『アクバル会典』の第4部「インド事情について」のなかの大項目「インドの学術」の冒頭部において、アブル・ファズルはインドの伝統的学術について概括的な説明を行なっている。まずはじめにこの部分を、やや長いけれども全文紹介することにしよう。

この大地(インド)には360種以上の知識と技能(shināsa'ī u kirdār)〔の

流派] がある。そうした勢い(流派)に頼んで千にのぼる対立(fitna 分裂)が生じ、人々は互いに相手を批判し諍い合っている。[しかしながら] 墮落した願望は破滅へと導き、敬神(izad-parastī)は精神を輝かす。この卓抜した書物(『アクバル会典』)の著者(アブル・ファズル)は多くの学者たちと交流し、銘銘の主張をある程度まで理解した。[彼らの主張の] 大半は見開きすること(dīd u shunūd 経験知)から逸れるものではない。彼らは理念上の論点(khayālī guftār)のない意見には取り合わないし、古えからの伝承(guzārish-i bāstānī)のない論拠は受け入れない。ある者たちは自らを論争家たち(dalīl-parastān)に属すと見なす。しかしながら彼らは[自分たちの] 不明さ(tiragī)のなかから曖昧さの錆を磨き取ろうとはしない。ある者たちは速足のヒトコブラクダとなって、[自分たちの] 見解の無分別さをなにがしかの課題のなかに包み込んで真理探究の館に持ち込み、うぬぼれて(az khweshtan-parastī) (4) 別の目的地に自分たちも到達したと思い込んでいる。ある者たちは禁欲家たち(bī-dilī firoshān)並びに独善家たち(hech khirān)に対して親近感を示したり、[自分たちの] 願望(khwāhish)の実現をめざして存在しないものに存在の飾り(ghāza-yi būd)をつけたりしている。こうした話は諸記録には収められていない。寄生者の食卓につけば、断食明けの食事をどうして有難いものと思えようか。しかしながら知恵の探究者たち(āgahī-joyān)の手土産(armaghānī)のために、9派に還元される諸学説(uṣūl)についてその要点(fihrist)を描くことはするとしても、各学派の教理(maqāsid)の検証(hujjat)は[ここでは] しないこととする。望むらくは、公正な考えの人々が深く観察を行ない、照明学派(Ishraqī) (5)・スーフィー(イスラーム神秘主義者)・逍遙学派(Mashshā'ī アリストテレス学派)・雄弁家(mutakallim)たちの方法と比較し、因習主義('adat-parastī)の障害を行く手から取り除き、その原因を見つけ出し、無学(bī-dānishī)からくる退嬰(istib'ād 無関心)を側に移して、先見の明を有せんことを。

この国土(ābād-būm)には8種の学派(guroh)が存在する。彼らは[この世の] 原始(mabda')と終末(ma'ad)、高度なあるいは低級な諸事実の

本質(zāt)と形態(ṣifāt)、慣習('adat)と信仰('ibadat)、王国の外延的および内包的な儀礼(ādāb)〔の在り方〕について、推論(istidlāl)でもって自説を説く。9番目〔の学派〕は並ぶものなき神を信ずることなく、〔事物の〕始原(āghāz)と終焉(anjām)を神に帰すことをしない。それぞれの学派にとって、理論('ilmī)と実践('amalī)と命名(nām-hā)は多様である。しかし〔彼らの多くは〕第一の師(mu'allim-i awwal アリストテレス)の時代よりも前のギリシア哲学(hikmat-i yūnān)の方法(namaṭ)に依っている。以前はヤシの樹(tār)の葉や白樺の樹皮(tūz)<sup>(6)</sup>の上に鋼鉄の尖筆(fulādī qulam)で書かれていたが、今では紙の上に書かれている。彼らは書くときは左から〔右へ〕書き始める。2葉が互いに貼り合わされることはないし、綴じ合わされることもない。多くの深遠な心理が叡知(bīnīsh)の灯りを強め、魂(dil)は安らぎを獲得する。〔我が〕心(khāṭir)が語るを止めて沈黙へ向おうとするのを如何せん。再三再四見られる如く形式的学問(rasmī 'ulūm)は煩雑さを増すものである。知識をかの階梯の高み〔に置くこと〕によって自己(nafs)は真理の頂上に到達し地位(jah)と財産(māl)を手に入れたとしても、人々は本性(ṭabī'at)の低みへと下っていくであろう。さらにまた時として〔我が〕純粋な精神の上に、知識の目的はパンと筆(khāma 名声)〔の獲得〕にあるのではないとする異議が影を落とす。〔各学派の〕明らかにしようとする者(padīd-āranda 探究者)が言葉で〔わかりやすく〕表現することはないし、明らかにされたもの(padīd-āmada)が魂をつかむこともない。このゆえに総じて語りの言葉(zabān-i guft)は沈黙の口蓋垂(kām-i khamoshī)に付着し、思索の頭は消沈の襟(garībān-i firo-raftagī)のなかに埋まる。とはいえ、時間に自由な(予定のない)者は誰でも、息を潜めて(沈黙して)おれば、どこからともなく言葉は伝わってくるものであり、また調査によれば、沈黙は以心伝心意が通じるものであり、啞者にも〔その意が〕解されるといわれている。誠に、舌を言葉で汚すのは無思慮の宮殿に自己を罷り出すようなものである。我が心は言葉の館(harf-sarā'i)から遠ざかり、我が舌根(zabān)は対話(guftār)を拒絶する。〔それが〕素質からくる躊躇(wā-māndagī)であるのか、それとも真実

の顕現(rū-namā'i)の先触れなのか、定かではない。行路の暗黒が私を困惑のなかに置き去りにしているのか、それともこの長い道程の隊商頭(qāfila-sālār 指導者)がまだ到着していないというのか。言葉は毒だらけの飲み物であり、沈黙は糖蜜だらけの毒物である。かくて秘め事(rāz)は真実の所持者〔の口〕からたやすく滴り落ちる。嘆願(niyāz)よりもよい獲物を私は捕えたことがないし、沈黙よりも明るい灯りを私は見たことがない。もしも〔学術〕事情がかくも錯綜しておらず、かつまた言葉の館から〔我が〕心が遠ざかってしまうことがなかったならば、インドの学問(Hindī dānish)をばギリシア〔の学問〕と同様のやり方で説明したであろう。目下のところ〔私の〕意図するところに従って、この書物にふさわしく、かつ時間に余裕がある限りの事柄を、書き記していくこととする。(『アクバル会典』テキスト、Vol. II, p.61, 1.1-p.62, 1.5.)

以上が「インドの学術」の冒頭部に配された、インドの伝統的学術に関する概括的説明の全文である。アブル・ファズルはまずはじめに、インドには学術流派の多いことを述べ、彼らの間で多数の論争の生じていることを明らかにしている。その論争を意味することばとして、反乱や暴動の意に使用されるフィットナ(fitna)という用語を使用し、論争が激しさを有していたことを明示しようとしている。

各学派に共通する特徴として、アブル・ファズルはその大半の主張が経験知から逸脱したものではないことを認めている。また彼らは理念上の論点および古代以来の伝承をそれぞれ重視することを指摘している。このようにインドの諸学派を評価したうえで、アブル・ファズルは彼らに対して遠慮のない批判を加えている。曰く、自分たちの主張のなかにある「曖昧さの鏝」の放置、「見解の無分別さ」に固執する傲慢さ、「存在しないものに存在の飾りをつける」強弁ぶり、等々。彼はまた「寄生者の食卓」という表現も使っている。これは何を意味するのであろうか。断食月(イスラム暦第9月のラマザン月)明けの食事は、どんな食物でも美味で有難いものに思われる。それと同様に、激しい探究の後に獲得された知識や真理は、たとえ小さなものではあっても尊く貴重だ。これに対して、さしたる疑問

もなく慢然と受け継がれてきた出来合いの知識にこのような尊貴さが認められるであろうか。アブル・ファズルが「寄生者の食卓」にたとえていいなかったことは、このことであろう。

360種を越えるインド学術の流派も、結局は9派に還元されるという。アブル・ファズルはこれら9派の学派のそれぞれについてその要点を紹介することを、ここでの自らの課題とし、各派の教理について検証や証明にまで立ち入ることはしない、と断っている。そして9派の教理のそれぞれを学問の広場に引き出し、さまざまな立場から比較検討することを読者たちに委ねている。アブル・ファズルが因習主義と退嬰的立場に批判的であったことは、このくだりからも明らかである。

9派に還元される学派といっても、そのうちの1派は無神論者たちであるから、もっと具体的にいえば8派プラス1派ということになる。これらの学派が主張する理論、実践、命名法は多様である。興味深いのは、伝統的な書写法として多羅ヤシの葉や白樺の樹皮に書く方法を紹介し、これらの方法に代って今では紙に書く方法が普及していることを指摘している点である。2葉を貼り合わせたり綴じ合わせたりしないといっているのは、貝葉や樹皮の中央部2カ所に小さな穴を開け、そこに紐を通して綴じる伝統的な書物の形式の継承について述べたものであろう。

「[我が] 心が語るを止めて沈黙へ向おうとするのを如何せん」以下の文章は、アブル・ファズル独特の修辞法が冴えわたった難解な文章の連続である。修辞を重疊的に重ねてここに延延とつづく文章は、簡単にいえば、インドの諸学派の煩雑な主張に対して抱く彼の違和感、気後れと抵抗感を包み隠さずに表白したものである。彼は若い時以来、著明な学者の父シャイフ・ムバーラクの開いた塾(学校)で古今東西にわたる学芸を猛然と学んだ身であったので、引用文の最後の方で述べているように、彼にはインドの学問をギリシアの学問の範疇や命題を援用して説明することは可能であったであろう。だがそういう形での説明は行わずに、『アクバル会典』の全体構成に必要と思われる範囲の記述を時間の許す限り行なっていくと述べて、この概括的説明の文章を結んでいる。

これにつづけて九派哲学の解説がはじまる。アブル・ファズルは各派の

解説を順次行なっていくのに先立って、九派の名称や相互の関係などについて簡単な説明を与えている。次にその文章もここで紹介しておこう。

九派哲学の解説。ナイヤーイカ派(Nayyāyika)—— nūn のア音と重複した下点付き yā と alif と下点付き yā のイ音と kāf のア音より成る<sup>(7)</sup>——はニヤーヤ哲学('ilm-i Niyāya)の学者(dānā)である。バイシェーキカ派(Baisheykhika)—— bā のア音と下点付き yā の黙音と付点の shīn の未知のイ音と下点付き yā の黙音と kāf および隠れた hā のイ音と kāf のア音より成る<sup>(8)</sup>——は、その学問と知識について後ほど論じられる。ベーダーンティー派(Beydāntiy)—— bā の未知のイ音と下点付き yā の黙音と dāl と alif と隠れた nūn と上点付き tā のイ音と下点付き yā の黙音より成る<sup>(9)</sup>——はベーダーント哲学('ilm-i Beydānt)の学者である。ミーマーンサク派(Mīmāṃsak)—— mīm のイ音と下点付き yā の黙音と mīm と alif と隠れた nūn と sīn のア音と kāf より成る<sup>(10)</sup>——はミーマーンサー哲学('ilm-i Mīmāṃsā)の知者(shināsanda)である。〔さらに〕サーンク派(Sāṅkh)—— sīn と alif と隠れた nūn と kāf および隠れた hā の黙音より成る<sup>(11)</sup>——とパータンジャル派(Patanjal)——ペルシア語の bā と alif と上点付き tā のア音と隠れた nūn と jīm のア音と lāl より成る<sup>(12)</sup>——とジャイナ派(Jayna)—— jīm のア音と下点付き yā の黙音と nūn のア音より成る<sup>(13)</sup>——とバウツダ派(Bawuddha 仏教徒)—— bā のア音と wāw のウ音と重複した dāl および隠れた hā のア音より成る<sup>(14)</sup>——とナースティカ派(Nāstika 無神論者)—— nūn と alif と sīn の黙音と上点付き tā のイ音と kāf のア音より成る<sup>(15)</sup>——〔の学者たちがいる〕。それぞれは別個の学問について論じており、その説明は後になされる。ブラーフマ(brāhma バラモン)は最後の三派を外道(gum-rāh)と考えている。〔バラモンの〕学者たちには、かの六派以外は認められていない。彼らは〔これら六派を〕カトダルサン(Khaṭdarsan)—— kāf および隠れた hā のア音とインド語の上点付き tā の黙音と dāl のア音と rā の黙音と sīn のア音と nūn の黙音より成る<sup>(16)</sup>——と呼んでいる。すなわち「学問の六つの道」(shash rawish-i dānish)の意である。ニヤーヤとバイシェーキカは独特

の関係(paiwand-i yak-tāy)を有しており、ベードーントとミーマーンサー、サーンクとパタンジャルもそれぞれ同様の関係にある。(『アクバル会典』テキスト、Vol. II, p.62, l.6-l.19.)

このようにアブル・ファズルは述べて九つの学派の名称を列挙し、バラモンたちの支持をえたいいわゆる正統派に属する六派と残る三派との間に当時もなお截然とした区別の設けられていたこと、並びに六派のなかでもニヤーヤ学派とヴァイシェーシカ学派、ヴェーダーンタ学派とミーマーンサー学派、サーンキヤ学派とパタンジャリ学派(ヨーガ学派)との間にそれぞれ親縁関係のあったことを簡潔に指摘している。

以下、アブル・ファズルはニヤーヤ学派、ヴァイシェーシカ学派、ミーマーンサー学派、ヴェーダーンタ学派、サーンキヤ学派、ヨーガ学派、ジャイナ教徒、仏教徒、無神論者の順に、九派哲学のそれぞれについて解説を行なっていく。それらの解説は学派によって長短が著しく、ニヤーヤ学派とジャイナ教徒に関する解説は相当に詳細であり、ヴァイシェーシカ学派と無神論者に関する解説は非常に簡単である。次節では仏教徒に関する解説を紹介することにしよう。

## 2 仏教徒

九派哲学の一つとして、アブル・ファズルが仏教徒について行なった解説は以下の如くである。少少長くなるが全文をここに紹介する。

この知恵の体系(ṭarz-i hoshmandī)の開祖(padīd-āranda)はブッド(Buddh)——bāのウ音と重複の dāl および隠れた hā より成る<sup>(17)</sup>——と呼ばれ、彼には多くの名前が残されている。一つはシャークムニ(Shakmuni)——付点の shīn と alif と kāf と mīm のウ音と nūn のイ音より成る<sup>(18)</sup>——で一般的にはシャークムニー(Shākamūnī)と呼ばれる。そして次のように信じられている。彼は善業(shāyista-kārī)の力によって知恵(āgahī)の最高の段階に到達し、全知者(hama-dān)となって解脱の至福(daulat-i mukt)<sup>(19)</sup>を獲得した。彼の父はビハール地方の辺境伯(marzbān)ラージャ・シッドウーダン(Siddhūdan)——sīn のイ音と重複の dāl お



よび隠れた *hā* のウ音と *wāw* の黙音と *dāl* のア音と *nūn* の黙音より成る<sup>(20)</sup>——であり、母はマヤー (*Māyā*) という名であった。彼が臍の道 (*rah-i naf*) を通って出生すると、神々しい光が照り輝き、大地は振動 (*junbish*) するに至り、ガンジス川 (*Gang*) の水が天上から降り注いだ。まさにこの時彼は7歩歩み、快い響きの言葉を滑らかな口調で話し、次のように語った。「〔これが〕私にとって最後の姿である<sup>(21)</sup>」。占星家たち (*akhtar-shināsān*) は次のように予告した。「彼の人生が29歳と7日を経たとき、王者 (*farmān-rawā*) の玉座に即き、救済 (*wā-rastagī*) の思いをもって立ち上がり、新たにある宗教 (*ā'inī*) を創立する」と。まさにこの年のこの月、彼は〔一切の〕交わり (*āmeza*) から心を解き放ち、荒野 (*ṣaḥrā*) の道へと進んでいった。彼はバナーラス (*Banāras* また *Banāris*) とラージギル (*Rājgir*)、あるいはその他の諸聖地 (*parastish-kadahā*) でしばらく過ごし、そして世界をさまよった後にカシュミールに入った。多くのインド人 (*Hindī-nizhād*) や外国人 (*ahl-i banādir*)<sup>(22)</sup>、あるいはカシュミール、チベット (*Tibbat*)、スキタイ (*Khaṭā*) の人々が彼を信奉した。この治世 (アクバルの治世) 第40年 (1595–96) には彼の死去から2962年が経過した<sup>(23)</sup>。彼は効験のある氣息 (*nafas-i gīrā*) を有し、超自然的な (*khāriq-i 'adāt*)<sup>(24)</sup> 力の持主であって、120歳の生涯を送った。ペルシアとアラブの学者たちはこの宗教をバフシー (*Bakhshī*)<sup>(25)</sup> と呼び、またチベットではラーマ (*Lāma*) と呼んでいる。ヒンドゥースターンではこうした人々 (仏教徒) がほとんど見られなくなって久しい。けれどもペーグー (*Pegū*) とダフナーサリー (*Dahnāsarī* テナッセリム) とチベットでは〔今日もなお〕見られる。皇帝に随行してカシュミールの快適な地を三度目に訪れたとき、〔この書の著者は〕この宗派 (*kesh*) の何人かの長老 (*pīr*) たちと知り合いになった。だが〔この宗派の〕学匠 (*dānish-munshī*) に会うことはなかった。またハーフィジ・アブルー (*Hāfiẓ-i Abrū*) とバナーキティー (*Banākītī*) が描いたような人物を目にすることもなかった<sup>(26)</sup>。バラモンたち (*brāhima*) は彼 (仏陀) を〔ヴィシュヌ神の〕9番目の化身 (*awatār*) と見なすが、しかし彼ら (仏教徒たち) は〔このように〕広く知られた形で (*ba-rawish-i mashhūr*) 〔仏陀を〕信奉

することはないし、そのようなこと(ヴィシュヌ神の9番目の化身)を仏陀に認めることはない。

比類のない神(izad-i bī-chūn)が肉体と結びつけられること(paiwand-i tan)<sup>(27)</sup>によって浄化されると考えられている。サーンク学派やミーマーンサー学派、ジャイナ教徒と同様に、彼ら(仏教徒)は創造(āfrīnīsh)が神によるものであるとは説いていない。この世(jahān)には始まり(sar-āghāz)も終わり(anjām)もないと彼らは考え、全世界(hamagī-'ālim)は瞬時のうちに無(nīstī)に帰し、次の瞬間には以前と同じように存在の姿(hastī)を取ると主張する。また彼らは善と悪(nek u bad)、地獄と極楽(dozakh u bihisht)の応報(pādāsh)を信じている。彼らは、知識(dānīsh)は理性的精神(nafs-i nāṭīqa)の顕現('arz)であると考え、彼らは彼(仏陀)の「教えに従う」禁欲主義者たち(tajarrud-guzīnān)となって頭を剃り、皮革と赤布で身を被い、沐浴(shust-u-shū'i)によって我が身を極めて清浄に保つ。彼らは食べ物として与えられたものは何でも拒まず、死んだもの(murda)は神の辟命(kushta-yi khudā)であると思い、それを食することは許容される(rawā)と考える。彼らは女性に接近せず、生き物を殺さない。また植物を生き物と考えて「無闇に」引き抜いたり切ったりすることを差し控える。「仏陀の教えは」次の6つの事柄に努めることを課している。すなわち瞋恚(khashm)の消滅、理性(khirad)の追究、恵まれない者(na-khwāsta)<sup>(28)</sup>への慈善(khair)、神への崇敬(izadī parastīsh)の自覚(āgahī)、自己浄化(khwīstan-gudāzī 質素な禁欲的生活)に耐える勇氣(dilīrī)、常時神とともに居ること(bā-khudā būdan)「の6つである」<sup>(29)</sup>。善(nekī)の源泉(sarmāya)として3つの事柄を挙げる。知恵と、貪欲を断つこと(bī-tama'i)と、嫉みを断つこと(bī-ḥasadī)とである。善業(khūb-kindār)と悪業(tabāh-kārī)の宿るところ(khāna)は12箇所あると彼らは考える。5つの感覚(panj-ḥawās)<sup>(30)</sup>と5つの感覚器官(panj-mudrik)<sup>(31)</sup>と心意(man)<sup>(32)</sup>と分別(bodh)<sup>(33)</sup>とである。これは12のアーヤトナ(āyatna)—— hamza と alif と下点付きの yā のア音と上点付き tā の黙音と nūn のア音より成る<sup>(34)</sup>——と呼ばれる。

彼らは4つの事柄(chahār chīz)について語り、パダールタ(padārtah)<sup>(35)</sup>

の代りにアールジャ・サッティヤ(ārja-sattiya)—— hamza と alif と rā の黙音と jīm のア音と sīn [のア音] と重複の上点付き tā のイ音と下点付き yā のア音より成る<sup>(36)</sup>——と呼んでいる。最初はドウッカ(dukkha)—— dāl のウ音と重複の kāf および隠れた hā のア音より成る<sup>(37)</sup>——すなわち苦(ghamm)である<sup>(38)</sup>。それには5種類あるとされる。〔1つ目は〕ウィッギヤーン(wiggyān)—— wāw のイ音と重複のペルシア語の kāf および下点付き yā と alif と nūn より成る<sup>(39)</sup>——すなわち慣習的知識(rasmī dānish)である。〔2つ目は〕ウィーダナー(wīdanā)—— wāw のイ音と下点付き yā の黙音と dāl のア音と nūn と alif より成る<sup>(40)</sup>——すなわち善悪の報い(bād-afrah-i nekī u badī)を受けることである。〔3つ目は〕サンギニヤー(saṅginyā)—— sīn のア音と鼻音の nūn とペルシア語の kāf のイ音と nūn と下点付き yā と alif より成る<sup>(41)</sup>——すなわち諸物の名号(nām-i chīzhā)である。〔4つ目は〕サンサカール(saṁsakār)—— sīn のア音と鼻音の nūn と sīn のア音と kāf と alif と rā より成る<sup>(42)</sup>——すなわち法(dharm)と非法(adharm)とが集まること(farāham āmadan)であって、次のように認める者たちがいる。あらゆる事物は絶えず無(nīstī)に帰そうとしており、次の瞬間には姿を現わそうとする。それと同じように、まさにこのこと(法と非法とがこもごも集まること)がある。それをこの名辞(サンサカール)で呼ぶのである、と。〔5つ目は〕ループ(rūp)—— rā のウ音と wāw の黙音とペルシア語の bā より成る<sup>(43)</sup>——である。〔以上が〕5つの構成要素(ākhshej)であって、これらの集まり来たるものはそれぞれ5種の苦(ghamm)をもたらすものであるが故に、以上のような名称でもって(ba-ān nām)呼ばれている。〔アールジャ・サッティヤ(四聖諦)の〕第2はサムダイ(samday)—— sīn のア音と mīm の黙音と dāl のア音と下点付き yā より成る<sup>(44)</sup>——であって、欲望(khwāhish 貪欲)と怒り(khashm 瞋恚)から生ずるものであり、それによって「〔これは〕私である」(man-am)と言ったり「それは私のものである」(ān az man-ast)と言ったりする。〔アールジャ・サッティヤの〕第3はマーラグ(mārag)—— mīm と alif と rā のア音とペルシア語の kāf の黙音より成る<sup>(45)</sup>

——で、この世は瞬時に無と化し次の瞬間には再現するという考えを  
会得すること (khoy shudan) である (46)。〔アールジャ・サッティヤの〕  
第4はニルード (nirūdh)—— nūn のイ音と rā のウ音と wāw の黙音と  
dāl と隠れた hā より成る (47)——で、解脱 (mukt) (48) と呼ばれる。この  
段階に到達するには、10の事柄が必要である。第1は慈善 (khair) を行  
なうこと。第2は悪業 (nikūhīdagī) を避け善業 (shāyista-kārī) を行なうこ  
と。すなわち、殺生すること、傷害を加えること、施与でないもの  
(nā-dāda) を横奪すること、純潔の裾 (dāman-i 'iṣmat) を汚すこと (49)、  
妄言を吐くこと、善良を咎めること、激情がちであること、無駄口を  
叩くこと、邪念を抱くこと、邪淫を犯すことの10の悪業から身を慎し  
むとともに、長老と師匠 (pīr u ustād) を鑽仰すること、仏像 (but) を礼  
拝すること、他の人々の信仰 (parastārī) を容認する (dīdan) こと、〔自分  
たちの〕後援者たち (nekū-kārān) を称賛すること、心優しい言葉によっ  
て善を行なうよう〔人々を〕誘うこと、否応なく人々を善行に就かせ  
ること、信仰〔の教え〕を学ぶこと、の7つの善業に努めることであ  
る。第3は称賛や批難によって喜んだり悲しんだりしないこと。第4  
は特別の流儀 (tarz) で坐ること。第5はこの人々 (仏教徒たち) がチャイ  
ティヤ (chaytiya)——ペルシア語の jīm のア音と下点付き yā の黙音と  
上点付き tā のイ音と下点付き yā のア音より成る (50)——と呼んでい  
る礼拝所 (parastish-gāh) に彫像 (paikar 仏像) を安置すること。第6は  
在るがままの如くに認識すること。第7はパータンジャル (Pātanjal) (51)  
において認められる〔三昧に至る〕八実修法 (hast chīz jog) に努めるこ  
と。第8は次の5つの事柄——すなわち1つに長老 (pīr) の教え  
(farmūda) を忠実に間違いなく信じ、2つにその教えを憶念 (yād dāshtan)  
して実践し、3つに厳しい精進 (tagāpū) に心身を尽瘁し、4つに心の  
表面からあらゆる外形 (ṣuwar) を削ぎ落とし、5つに比類なき神 (dādār-i  
bī-himāl) 以外を念じないようにすること——を自らの内に現ぜしめる  
こと。第9は知恵の紐 (sar-rishta-yi āgahī) が切れないようにこれを二重  
にすること。第10は解脱 (mukt) に至る認識 (dānish 知恵) の端緒〔を獲  
得すること〕。〔以上の10の事柄が解脱段階の到達に必要なである。〕

規準 (pramān) は、この集団 (仏教徒たち) にとっては現見 (partacha) と個我 (ātmā) とである (52)。また彼らは知識 ('ilm) の源泉 (sar-māya 元手) として2つの事柄を指摘する。1つは諸感覚 (ḥawāss) によって獲得されるものであり、もう1つは因明 (istidlāl 論証) によって明証されるものである。前者については4種存在する。五感によって明らかとなるもの、あるいは何人にも〔常識によって〕知覚されるもの、あるいは諸物 (ashyā') の知識によって認識されるもの、あるいは禁欲 (riyāzat) によって (53) 隠れたもの (poshida) と明らかとなったもの (paidā) とが一体性 (yaksānī) を有するようになるもの、の4種である。

類推 (qiyās) の議論と形相 (ḥi'at) <sup>けいそう</sup> の解釈において、これまでに微妙な意味合いをもつ (bārik) 多くの言葉が語られてきた。

この集団 (仏教徒たち) は4種〔の宗派〕に分かれている。第1はヴァイバーキカ派 (Vaibhākḥika) —— wāw のア音と下点付き yā の黙音と bā および隠れた hā と alif と kāf および隠れた hā のイ音と kāf のア音から成る (54) —— であって、この宗派の人々は4種の要素 ('anāṣir) のそれぞれについてニヤーヤ学派と同様に個別の不可視の成分 (ajza' 分子) 〔の存在〕を認めるが、しかしこれらは視覚 (ḥiss-i baṣar) によって感得できると考えている。この宗派の人々の考えでは、存在 (hastī) を莊嚴するもの (ṭirāz) としては認識 (dānish) とその対象 (ashyā') という2つの事象 (chīz) がある。そのうちの後者は感覚 (ḥawāss) によって知覚 (感得) されうるものである。第2はサウティラーンティカ派 (Sautirāntika) —— sīn のア音と wāw の黙音と上点付き tā のイ音と rā と alif と隠れた nūn と上点付き tā のイ音と kāf のア音から成る (55) —— で、彼らは対象は類推によって理解されるもの (mudrak) であると考えている。第3はジューガーチャール派 (Jūgāchār) —— jīm のウ音と wāw の黙音とペルシア語の kāf と alif とペルシア語の jīm と alif と rā より成る (56) —— で、彼らは認識 (dānish) 以外実在しないと考え、対象は認識の仮象 (nairangī) であると解している。第4はマードディヤミカ派 (Maddhiyamika) —— mīm と alif と重複の dāl および隠れた hā のイ音と下点付き yā のア音と mīm のイ音と kāf のア音より成る (57) —— で、

認識と対象とをスンヌ(sunn)—— sīn のウ音と重複の nūn の黙音より成る<sup>(58)</sup>——と称している。彼らは、存在(hast 有)と非存在(nist 無)と「のいずれ」に対しても決めてかかることはない(jazm na-kunand)。

多くの論書(nāma)がそれぞれの宗団(rawish)において用意されており、外面的(ṣūrī 客観的)および内面的(ma'nawī 主観的)な諸問題に関しては「さまざまな」相違が生じている。彼らは3種の学問('ilm 知識)が大切である(mu'tabar)であると考えている。因明(istidlāl)の学問(論理学)と、「体調の」整序(intizām)の学問<sup>(59)</sup>と、内面的世界(ma'nawī mulk)の探索(rah-nawardī)の学問<sup>(60)</sup>とである。(『アクバル会典』テキスト、Vol. II, p.111, 1.6-p.113, 1.21.)

アブル・ファズルが行なった仏教徒についての解説の全文は以上の通りである。また仏陀生誕にまつわる伝承も紹介している。仏陀が出家の道を選んだことを、「荒野の道に進んだ」と表現している。この解説文の執筆は、アクバルの治世第40年と考えられるが、仏滅はこれより2962年前としている。しかしこれで計算すれば、注(23)で指摘したように仏滅年があまりにも過去に遡及され過ぎてしまうことになる。2962年前というのを1962年前の誤記ということにすれば、仏滅年は紀元前366年となり、北伝説の例えば宇井伯寿の仏滅年説(前386年)に近づいてくる。また仏入滅を120歳のときとしているのもこの解説文の特徴で、仏陀の生涯を40年長くしている。

「ヒンドゥースターンではこうした人々(仏教徒)がほとんど見られなくなって久しい」と述べられている。ここで「ヒンドゥースターン」というのは、インダス川・ガンジス川流域の北インドをさしているようだ。しかしインド周辺のペグーやテナッセルム、チベットでは今なお仏教が信奉されているとし、アクバルに随行してカシュミールを訪問した際に何人かの仏教の長老と知り合いになった、とアブル・ファズルは述べているので、カシュミール地方ではこの当時もなお仏教が命脈を保っていたことが分かる。彼が仏教の教義を解説、紹介するとき、その知識の源泉がこうした長老からの聞き取りに大きく拠っていたことはまず間違いないであろう。

アブル・ファズルは、続いて仏教の教義内容の紹介に移る。それらは仏教徒の生活規範からはじまって、六(五)境と六根、四諦、五蘊と苦諦、さ

らには解脱論に至る多方面にわたっており、これらを正確に理解することは容易ではないが、彼の行論を理解するうえで最小限必要なことは、訳文中の補記や注記によって説明しておいた。彼はさらに分説部・経量部・瑜伽行派・中観派の4つの宗派が当時の仏教にあったこと、および五明のうち因明と医方明と内明との3分野の学問を仏教徒たちが重視していたことを紹介して、この仏教徒たちについての解説を終えている。

### 3 アブル・ファズルの学術紹介の特徴

アブル・ファズルが『アクバル会典』のなかで行なったインドの伝統的学術についての概括的説明や仏教徒についての解説において見られる特徴点を、以下にいくつか挙げておきたい。

第1はインドの伝統的学術あるいは九派哲学についての情報源である。11世紀前半にビールーニー(973—1048ころ)がアラビア語で著した該博なインド紹介書『インド誌』(*Kitāb al-Hind*)<sup>(61)</sup>をはじめとして、ムガル朝の帝室図書館で利用可能な優れた文献をアブル・ファズルが利用したことは間違いないであろう。仏教徒の紹介のところでは、ハーフィジ・アブルーとバナーキティーの2人の人物を挙げて、彼らの作品を読んでいたこともアブル・ファズルは明らかにしていた。しかし彼がインドの伝統的学術や九派哲学について獲得した情報の主要な源泉は、各派の学者たちとの交流によってえられたものであったと思われる。そのことは、インドの伝統的学術の概括的説明を行なった文章からも察知することができる。バラモンの優れた学者たちと交流し、彼らから必要な情報や知識を獲得する方法は、実はビールーニーも採用した方法であった。ただしアブル・ファズルの時代になると、仏教徒はヒンドゥースターンで「ほとんど見られなくなって久しい」ので、彼らと交流することは容易でなかった。僅かにカシュミール地方には当時なお仏教徒がいたようで、「この宗派の何人かの長老たちと知り合いになった」とアブル・ファズルは述べている。

第2は伝統学術の各学派に対する彼の態度である。アブル・ファズルはどの学派に対しても旺盛な知的好奇心をもって臨み、彼らの主張や教理を

広くイスラーム哲学の用語を用いて類比的にとらえようとする姿勢を貫いた。彼が少年期以来学んできたギリシア哲学をはじめとする多方面にわたる学問分野の習得が、彼のこのような姿勢を支えていた。彼はどの学派に対しても特別に深くコミットすることを避け、いわば等距離的に接しようとしていたように思われる。にもかかわらず彼の紹介や解説に精粗・長短が見られるのは、当時の各学派の実勢や、従ってまたそれぞれの学者たちとの交流の密度の濃淡に因ったものであろう。当時の仏教徒の実情については上に記した通りであるが、これに対して例えばジャイナ教徒はその指導者たちがアクバル時代の宮廷にかなり多く出入りし、「信仰の館」(‘ibādat-khāna)での宗教論議に参加することもあった。こうした事情のためであろう、アブル・ファズルのジャイナ教徒紹介の記述は、仏教徒のそれに比べてはるかに詳しい。無神論者についての紹介の記述は、彼らとの交流が実際にはなかったからであろうか、極端に簡略である。

第3はインドの固有名詞や学術用語・宗教用語の表記において、正確を期す方法が採られていることである。アブル・ファズルが『アクバル会典』を著した言語のペルシア語と、インドの伝統的学術の主要言語であったサンスクリット語は、互いに言語系統を異にしていた上に、使用する文字も前者はアラビア文字、後者はデーヴァナーガリー文字というように全く異なっていた。このため、サンスクリット語の用語をできるだけ正確にペルシア語で転写するには工夫が必要であった。アブル・ファズルの用いた転写法は、本稿の引用文紹介中にその都度煩雑さを厭わずに注記で示しておいたが、それらの特徴を摘記してみるとおよそ次のようなものである。

- (i) 長母音 ū。例えば yū は「下点付き yā のウ音と wāw の黙音」(ṣamm-i yā-yi taḥṭānī wa sukūn-i wāw)で示される。こういうときの「wāw の黙音」(sukūn-i wāw)は音引きの役割を果たしている。
- (ii) 短母音 ě。「未知のイ音」(kasr-i majhūl)で示される。
- (iii) 長母音 e。例えば me は「mīm の未知のイ音と下点付き yā の黙音」(kasr-i majhūl-i mīm wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī)で示される。こういうときの「下点付き yā の黙音」(sukūn-i yā-yi taḥṭānī)は音引きの役割をする。
- (iv) 短母音 ö。「未知のウ音」(ṣamm-i majhūl)で示される。



- (v) 長母音 o。例えば jo は「jīm の未知のウ音と wāw の黙音」(ḡamm-i majhūl-i jīm wa sukūn-i wāw)で示される。こういうときの「wāw の黙音」は音引きの役割をする。
- (vi) 二重母音 au。例えば sau は「sīn のア音と wāw の黙音」(fath-i sīn wa sukūn-i wāw)で示される。
- (vii) 鼻音 ṇ。「隠れた nūn」(nūn-i khafī)で示される。
- (viii) 帯気音の h。例えば tha は「上点付き tā および隠れた hā のア音」(fath-i tā-yi fauqānī u hā-yi khafī)で示される。
- (ix) 卷舌音 ṭ。「インド語の上点付き tā」(tā-yi fauqānī-yi Hindī)で示される。
- (x) 卷舌音 ḍ。「インド語の dāl」(dāl-i Hindī)で示される。
- (xi) 子音結合。例えば dri は「dāl および rā のイ音」(kasr-i dāl u rā)で示され、あるいは srūp は「sīn および rā のウ音と wāw の黙音とペルシア語の bā」(ḡamm-i sīn u rā wa sukūn-i wāw wa bā-yi Fārsī)で示される。

本稿の引用文中においてアブル・ファズルが使用していたサンスクリット語の用語のペルシア語転写法は、以上のような方式に基づいていた。これによって、アクバル時代のインドの学術用語が北インドにおいてどのように発音されていたか、それを転写するためのペルシア語の表記法はどのような特色を有していたか、などを知る重要な手掛かりをえることになる。

## おわりに

歴史家たちが『アクバル会典』を研究する際、インドの伝統的学術について論じた同書第2巻の当該箇所が注意深く検討されることは従来ほとんどなかった。また思想史家たちがこの部分に注目することもほとんどなかった。原書第2巻の英語版を担当したジャレットは、これを分かって英語版の第2巻と第3巻とし、伝統的学術に関する記述部分は第3巻の方に収めている。彼は随分苦勞しながら多大の努力を傾注し豊富な注釈を加えた英訳を完成させた。しかし今日から見てみると、彼の英語版には誤解や誤記から免れていないところが少なからずある。彼の英語版を点検して第2巻の第2巻、第3巻を編集したのはジャドゥナート・サルカールであった

が、インド独立直後の刊行(1948—49年)で印刷・出版事情が厳しかったためか、ジャレットが用意した研究手掛かりとなる注記の多くを削除してしまった。

本稿で手掛けたような方面の研究は、近年までに達成された著しい研究成果を踏まえながら、イスラーム学とインド思想史との両面における素養を生かしてなされるべき研究分野である。今は、ただ非才を顧みずできるだけのことを果していくしか術はない。本稿はご覧の如く、アブル・ファズルが『アクバル会典』のなかで行なったインドの伝統的学術の概括的説明のところと仏教徒についての解説・紹介のところとをそれぞれ全文紹介し、彼のインド学術の紹介において見られる特徴を3点紹介したものに過ぎない。インドの六派哲学やジャイナ教徒についてアブル・ファズルが行なった詳しい解説については、今回は紹介と検討を行なうことが全くできなかった。機会があれば後日果していきたいと思っている。

イルファン・ハビーズ教授の論文によると、『アクバル会典』の成稿より約60年後の1653年ごろにムガル朝下のインドで成った書『ダビスターニ・マザーヒブ』(*Dabistān-i Mazāhib* 諸宗教の学園の意)には、イスラーム教各派はいうに及ばず、ゾロアスター教やヒンドゥー教、仏教、ユダヤ教、キリスト教の各宗教を偏向を避けながら論じようとした諸章が収められていて、各宗各派の実情を知るには大いに有益な文献であるということである<sup>(62)</sup>。いずれ折を見てこの文献についてもふれることができれば、と願っているところである。

## 注

- (1) Abu'l-Fazl, *Ā'in-i Akbarī*, ed. By H. Blochmann, Vol.II, Calcutta: The Asiatic Society of Bengal, 1877, pp.61-114. 刊本では他にラクナウ版 *Ā'in-i Akbarī*, Vol.III, Lucknow: Nawal Kishor, 1869, pp.84ff. があるが、今回は両刊本を対校しながら検討する時間的余裕はなかった。なお「インドの学術」の見出しがラクナウ版では「インドの学術の修得者たち」(*dānish-andozān-i Hindūstān*)となっている。
- (2) Persian MS, BL Add. 7652, ff.332a-366a.
- (3) *The Ain i Akbari by Abul-Fazl Allami*, English tr. by H.S. Jarrett, Vol.III, Calcutta: The Asiatic Society of Bengal, 1894, reprint, Osnabrück, 1983,

pp.125-218, 2nd edition, by Jadu-Nath Sarkar, Calcutta: The Asiatic Society of Bengal, 1948, reprint, New Delhi: Crown Publications, 1988, pp.140-228. なおウルドゥー語版 *Ā'in-i Akbarī*, Urdū tr. by Muḥammad Fadā 'Alī, Book 3, Hyderabad: Osmania University, 1939, reprint, Lahore: Sang-e-Meel, 1988, pp.104-187もあるが、時間的制約があって今回は十分参照することができなかった。

- (4) parastī がテキスト (p.61, l.8) では間違つて yarastī となっている。
- (5) 12世紀にイランで活動した哲学者スフラワルディーを祖とする学派。その主張にはプラトン哲学の再興も含まれる。
- (6) tūz は『アクバル会典』第3部のカシェミール地方を扱ったところでいまだ一度記されており、英訳者ジャレットはこれに詳しい注記を施している。English tr., Vol.II, p.351, n.3. ジャレットはそこで tūz の語源を不明としているが、プラッツはそれがサンスクリット語の tvac (皮膚、樹皮) から出たことばであることが明記されている。John T. Platts, *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī, and English*, Oxford: Oxford University Press, 1960 (1884), p.343.
- (7) インド起源のことばの表記に正確を期すため、ナイヤーイカに続けてこのような表記の仕方を付記している。原文をローマ字で記すと次の通りである。ba-faṭḥ-i nūn wa yā-yi taḥṭānī-yi mushaddad wa alif wa kasr-i yā-yi taḥṭānī wa faṭḥ-i kāf.
- (8) 原文は次の通り。ba-faṭḥ-i bā wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī wa kasr-i majhūl-i shīn-i manqūta wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī wa kasr-i kāf u hā-yi khafī wa faṭḥ-i kāf. インド系言語の二重母音 ai は、「bā のア音と下点付き yā の黙音」(faṭḥ-i bā wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī) すなわち bay のような形で示される。「未知のイ音」(kasr-i majhūl) とはエの短音 (ē) のこと。アラビア語は元来 a, i, u の3母音を基本とするので、このように表現している。これに「下点付き yā の黙音」(sukūn-i yā-yi taḥṭānī) が結合するとエの長音 (ē) となる。こういうときの y 音は ē 音を長音化する音引きの役割を果たしている。「kāf および隠れた hā」(kāf u hā-yi khafī) とは、インド系言語に見られる軟口蓋の無声帯気音 kh を示している。六派哲学の一つ Vaiśeṣika 学派(勝論派)は、このようにペルシア語で Baysheykhika と表記されている。
- (9) 原文。ba-kasr-i majhūl-i bā wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī wa dāl wa alif wa nūn-i khafī wa kasr-i tā-yi fauqānī wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī. 「隠れた nūn」(nūn-i khafī) とは鼻音の n のこと。「上点付き tā のイ音と下点付き yā の黙音」(kasr-i tā-yi fauqānī wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī) すなわち tiy は、長音化さ

れたティー音(tī)を示し、ここでも y 音は音引きの役割を果たしている。

- (10) 原文。ba-kasr-i mīm wa sukūn-i yā-yi taḥtānī wa mīm wa alif wa nūn-i khafī wa fath-i sīn wa kāf.
- (11) 原文。ba-sīn wa alif wa nūn-i khafī wa sukūn-i kāf u hā-yi khafī.
- (12) 原文。ba-bā-yi Fārsī wa alif wa fath-i tā-yi fauqānī wa nūn-i khafī wa fath-i jīm wa lāl.
- (13) 原文。ba-fath-i jīm wa sukūn-i yā-yi taḥtānī wa fath-i nūn.
- (14) 原文。ba-fath-i bā wa ḡamm-i wāw wa fath-i dāl-i mushaddad u hā-yi khafī.  
「ba のア音と wāw のウ音」(fath-i bā wa ḡamm-i wāw)は bawu の音を表示するが、これによって二重母音 au と結合した b 音すなわち bau を表そうとしたものと解される。
- (15) 原文。ba-nūn wa alif wa sukūn-i sīn wa kasr-i tā-yi fauqānī wa fath-i kāf.
- (16) 原文。ba-fath-i kāf u hā-yi khafī wa sukūn-i tā-yi fauqānī-yi Hindī wa fath-i dāl wa sukūn-i rā wa fath-i sīn wa sukūn-i nūn. 「インド語の上点付き tā」(tā-yi fauqānī-yi Hindī)とは、インド諸言語に特徴的な反舌の無声無気音 ṭ をさす。
- (17) 原文。ba-ḡamm-i bā wa dāl-i mushaddad u hā-yi khafī.
- (18) 原文。ba-shīn-i manqūṭ wa alif wa kāf wa ḡamm-i mīm wa kasr-i nūn.
- (19) mukt はサンスクリット語(以下 Skt. と略記) mukta の俗語形。mukta は mukti(解脱)の状態を示す形容辞。
- (20) 原文。ba-kasr-i sīn wa ḡamm-i dāl-i mushaddad u hā-yi khafī wa sukūn-i wāw wa fath-i dāl wa sukūn-i nūn. Siddhūdan は Skt. Śuddhodana(パーリ語 Suddhodana 浄飯王)の転訛形。
- (21) 原文。wā-pasīn paikarī paiwand-i man ast. この文章は、『ブッダチャリタ(仏所行讃)』第1章において仏陀が自分の出生について述べているところを踏えたもので、今回の生誕が自らの輪廻の最後となるものであることを前もって宣明したことを示すものである。
- (22) banādir は bandar(海港)の複数形で、ahl-i banādir は「諸々の海港から来た人々」が原意。
- (23) アクバル治世第40年は西暦1595年の春分の日から始まる1年間(太陽暦)であるので、これから仏陀入滅年を計算してみると紀元前1366年という途方もない年となる。テキスト、写本ともに2962年(do hazār u nuḥ ṣad u shaṣṭ u do sāl)となっているが、仮りに冒頭の数次2(do)を衍字とすれば紀元前366年となり、北伝の仏滅年に近くなる。

- (24) ‘adāt は ‘adat (慣習) の複数形。全体で「慣習を越えた」「超自然的な」の意となる。
- (25) bakhshī の語源としては、ペルシア語の動詞 bakhshīdan (施与する、容赦する) の語根 bakhsh に抽象名詞化語尾 ī が付されたものと考え、「布施」や「慈悲」を意味するものと解することができる。別に Skt. bhikṣu (比丘) の転訛形とする見方もありうる。
- (26) ハーフィジ・アブルーはティムール朝時代のヘラートの歴史家(1430没)。ペルシア語の歴史書、地理書を多く残している。一方、バナーキティーは中央アジアのバナーカト (Banākat) 出身のイル・ハーン朝時代の詩人、歴史家(1330没)。彼の著した史書にはインド・中国・蒙古の記述も含まれており、H.M. Elliot and John Dowson (eds.), *The History of India, as Told by its own Historians: The Muhammadan period*, Vol.III, London, 1867, reprint, Allahabad, 1970, pp.55-59には簡単ながらこの著者と書の紹介がなされている。
- (27) paiwand-i tan は英語版で化身 (incarnation) と訳されている。Eng.tr., Vol. III, p.213.
- (28) この語は動詞 khwāstan (「望む」「必要とする」) の過去分詞 khwāsta に否定の接頭辞 na- が付いたもの。khwāsta には「望まれた」「必要とした」の意の他に「富」や「所有」の意もあるので、na-khwāsta は本文のように訳している。BL Add. 7652, f.364b, l.13もテキスト同様に na-khwāsta と記されているが、テキスト Vol.II, p.112, n.1にはこの箇所を khair-i khwāstan あるいは khair u chīz-i khwāstan とする写本のあることが紹介されている。
- (29) 説一切有部にいう六根本煩惱(貪・瞋・痴・慢・疑・見)に対応するものかどうか、未だ判然としない。
- (30) 色(視覚)・声(聴覚)・香(嗅覚)・味(味覚)・触(触覚)の五感覚。五境。これに次行の分別(法境)を加えると六境となる。
- (31) 眼・耳・鼻・舌・身の感覚器官。五根。
- (32) man は Skt. manas に対応。五根にこの心意(意根)を加えると六根となる。
- (33) テキストも BL Add. 7652の写本も dīwharah と読めるが、ここではテキスト Vol.II, p.112, n.2に従って wa bodh (「と分別」) と読むことにする。六根の最後の意根(心意)の作用対象としての法境(分別)を示したものと解される。
- (34) 原文。ba-hamza wa alif wa fath-i yā-yi tahtanī wa sukūn-i tā-yi fauqānī wa fath-i nūn. alif の後の wa fath-i はテキストで欠落。BL Add. 7652の写本で補った。āyatna は Skt. āyatana の転訛で処あるいは座と訳される。六根と六境を合わせた十二処をさしている。

- (35) Skt. padārtha に対応する語。漢訳ではこれを句義とする。範疇のこと。
- (36) 原文。ba-hamza wa alif wa sukūn-i rā wa fath-i jīm wa [fath-i] sīn wa kasr-i tā-yi fauqānī-yi mushaddad wa fath-i tā-yi taḥṭānī. テクスト、BL Add. 7652 写本ともにキッコー [ ] 中の語が欠けている。ārja-sattiya は Skt. ārya-satya (尊い真理、聖諦) の転訛。ここでは四聖諦 (catur-ārya-satya) をさしている。
- (37) 原文。ba-ḡamm-i dāl wa fath-i kāf-i mushaddad u hā-yi khafī. dukkha は Skt. duḥkha (苦、苦諦) の転訛形。
- (38) BL Add. 7652, f.364b, l.19 の余白には、dukkha の綴りを紹介した直後に入れるべきことばとして ya'nī ghamm (「すなわち苦」) の 2 語を記している。テキストにはないが、これを採用した。以下、まず苦諦を五蘊でもって説明している。
- (39) 原文。ba-kasr-i wāw wa kāf-i Fārsī-yi mushaddad u yā-yi taḥṭānī wa alif wa nūn. wiggyān は Skt. vijñāna (識、認識作用) の転訛形。
- (40) 原文。ba-kasr-i wāw wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī wa fath-i dāl wa nūn wa alif. wīdanā は Skt. vedanā (受、感受作用) を表したもの。
- (41) 原文。ba-fath-i sīn wa nūn-i khafī wa kasr-i kāf-i Fārsī wa nūn wa yā-yi taḥṭānī wa alif. 鼻音の n を「隠れた nūn」(nūn-i khafī) と表記しているのに注目。saṅginyā は Skt. saṃjñā (想、表象作用) の転訛形。
- (42) 原文。ba-fath-i sīn wa nūn-i khafī wa fath-i sīn wa kāf wa alif wa rā. saṅsakār は Skt. saṃskāra (行、意志作用) を表したもの。
- (43) 原文。ba-ḡamm-i rā wa sukūn-i waw wa bā-yi Fārsī. rūp は Skt. rūpa (色、認識対象) を表したもの。
- (44) 原文。ba-fath-i sīn wa sukūn-i mīm wa fath-i dāl wa yā-yi taḥṭānī. sam-day は Skt. samudaya (集苦、集諦) の転訛形。
- (45) 原文。ba-mīm wa alif wa fath-i rā wa sukūn-i kāf-i Fārsī. mārag は Skt. mārga (道、道諦) の転訛形。
- (46) 八正道の具体的な説明は省かれている。
- (47) 原文。ba-kasr-i nūn wa ḡamm-i rā wa sukūn-i waw wa dāl wa hā-yi khafī. nirūdh は Skt. nirodh の転訛形で、滅、滅尽を意味する。すなわち滅諦をさす。
- (48) Skt. mukti の転訛形。
- (49) 色欲の自制が利かぬことを意味するか。
- (50) 原文。ba-fath-i jīm-i Fārsī wa sukūn-i yā-yi taḥṭānī wa kasr-i tā-yi fauqānī wa fath-i yā-yi taḥṭānī. chaytiya すなわち Skt. caitya は寺院の祠堂をさす。
- (51) ヨーガ学派の開祖パタンジャリ (Patañjali)。この学派の基本経典『ヨーガ・

- ストラ』は紀元2—4世紀ごろの成立と考えられ、彼の作とされている。
- (52) この文章の原文は *parmān nazd-i īn guroh partacha wa ātmā* であるが、文意はなかなか判然としにくい。*parmān* は Skt. *pramāṇa* の転訛形で定量、標準の意があり、*partacha* は Skt. *pratyakṣa* の転訛形で現前、現量の意があり、*ātmā* は Skt. *ātman* の転訛形で自我、靈魂の意がある。敢えて文意を敷衍すれば、「仏教徒たちにとって、如上の解脱段階の到達度を測る準則は、各段階の特徴がどの程度現われ、それに我の自性がどのように饗応しているかによって明らかとなる」といった内容を述べようとしたものか。
- (53) テキストでは「禁欲によって」(*ba-riyāzat*)の後にピリオドが打たれ文章が途中で切断されているが、ジャレットが英語版 Vol.III, p.125, n.3で指摘しているように、ここでピリオドを打つのはテキスト校訂者の間違いである。
- (54) 原文。*ba-fath-i wāw wa sukūn-i yā-yi tahtānī wa bā u hā-yi khafī wa alif wa kasr-i kāf u hā-yi khafī wa fath-i kāf*. *Vaibhakhika* は Skt. *Vaibhāṣika* (分説部)の転訛形。漢訳ではまた分説者。仏典注釈書ヴィバーシャ (*Vibhāṣa* 毘婆沙)に主として拠る人々をさす。
- (55) 原文。*ba-fath-i sīn wa sukūn-i wāw wa kasr-i tā-yi fauqānī wa rā wa alif wa nūn-i khafī wa kasr-i tā-yi fauqānī wa fath-i kāf*. *Sautirāntika* は Skt. *Sautrāntika* の転訛形。経量部をさす。漢訳ではまた経部者。
- (56) 原文。*ba-ḡumm-i jīm wa sukūn-i waw wa kāf-i Fārsī wa alif wa jīm-i Fārsī wa alif wa rā*. *Jūgāchār* は Skt. *Yogāchāra* の転訛形。瑜伽行派をさす。漢訳ではまた観行者、修観行者など。
- (57) 原文。*ba-mīm wa alif wa kasr-i dāl-i mushaddad u hā-yi khafī wa fath-i yā-yi tahtānī wa kasr-i mīm wa fath-i kāf*. *Māddhiyamika* は Skt. *Mādhyamika* の転訛形。中観派をさす。漢訳ではまた中道者、中観論者など。
- (58) 原文。*ba-ḡamm-i sīn wa sukūn-i nūn-i mushaddad*. ヒンディー語の *sun* と同一語で、Skt. *śūnya* の転訛形。空虚、欠如を意味する。
- (59) 医方明すなわち医学を意味するようである。
- (60) 内明すなわち形而上学を意味するようである。
- (61) Edward C. Sachau (tr.), *Alberuni's India: An account of the religion, philosophy, literature, geography, chronology, astronomy, customs, law and astrology of India about A.D. 1030*, 2 vols., London, 1910, reprint, Lahore, 1962.
- (62) Irfan Habib, "A Fragmentary Exploration of an Indian Text on Religions and Sects: Notes on the earlier version of the *Dabistan-i Mazahib*," *Proceedings of the Indian History Congress*, 61st Session, 2001, pp.474-491.